

郵便
報知新聞
第七百二号

七月十八日朝雲の晴て昼後俄の涼暑
強しに教寄屋町の綾妓天野屋あふ
たの浅草三社祭の見物より帰るにあら
苦しと帶を着物に脱棄て燃立とき
緋の湯の往來近き探端は涼し死
風を松葉菜太柄の團扇揺りてこと
るに呉る白うねと云ぬむうりのさ
自慢をうも折とて巡査をさかめ
其の引立行うんとせし然近
辺の人々立入り切はむて浴衣細
帯行祖脱違式の罪はまきし
ハ實は寛猛中を得て保護乃
道のちりふり

三遊亭圓朝記



彫工 銀

三遊亭圓朝記